

Sesshu 雪舟没後 500年

Master of Ink and Brush: 500th Anniversary



『本朝画史』 狩野永納編 元禄六年（1693）刊
約400人の画家のなかで、雪舟伝の記事量は突出して多く、全9ページにわたる。写真上段の宝福寺の逸話は本書が初出。写真下段には中国へ渡った際のエピソードが載る

本朝画史が記す雪舟 2

『本朝画史』の雪舟記事には、総社市に関連するものとして備中赤浜で誕生したこと、姓が小田氏であること、宝福寺の小坊主時代に涙でネズミを描く逸話を残したことなどが含まれています。ただし、それが真実か否かについての検証は必要です。

それでは再び誕生地問題へ戻しましょう。『本朝画史』が記す「備中赤浜」は、雪舟の同時代人が語る「備中」以上により具体的な地名であり、現在の総社市赤浜が該当します。つまり、雪舟の没後200年近くを経て「赤浜」が登場したということなのです。そして『本朝画史』以降に

編さんされた資料のほとんどすべてが「備中赤浜」説を採用しています。とはいえ、江戸時代の終わりごろには、賀陽郡田中村（現岡山市高松田中）出身、本姓田熊説も唱えられ始めました。もっとも、雪舟誕生当時の田中村は赤浜村の一部であった可能性が大きいようです。

現在、岡山総社インターチェンジの南、赤浜付近には、高さ180cmほどの二基の雪舟顕頌碑が300mほど隔たって立っています。

①画聖雪舟誕生碑（総社市赤浜）

題字は徳富蘇峰。文章は山田準が起草し、書は中島嘉一。昭和12年8月成稿、昭和14年完成。雪舟は岡山県人として吉備真備・和気清麻呂・法然・房源空・明庵栄西らと同格の偉人、五傑の一人であると強調したものだ。

②雪舟遺蹟碑（岡山市高松田中）

題字はこれも徳富蘇峰で、裏面の文章も蘇峰、書は大原桂南。昭和15年完成。田中村田熊説を主張する異色のもの。

しかし江戸末期の段階ではこの田熊氏説を支持する声は皆無に等しく、明治になっても本姓は小田氏のはずで、田熊氏説は疑わしいとされました。が、雪舟が小田氏の出身であるとした資料も『本朝画史』以前にはなく、実は小田氏説も確定し難いのです。

文／岡山県立美術館学芸課長 守安 収

2006 JUN
平成18年6月1日 No.15

【輝いている人】10p
野口敦史

【まちの話題】11p
吉備路れんげまつり グリーンデイ2006
藤岡初太郎さん満百歳

【市政トピックス】4～7p
市民大学講座 受講生募集
市文学選奨 作品募集
子どもたちに未来を託す
情報公開 29件 個人情報保護 7件開示請求
多彩な企画で雪舟顕彰
5月臨時市議会
災害への備え 万全に
この夏は源流の家へ

特集◎男女共同参画 2p

男女が互いに認め合い、共に輝いて生きていこう

発行／総社市役所 編集／企画課秘書広報係
〒719-1102 岡山県総社市中央二丁目1番1号

電話0866(0)82-4 FAX0866(0)9479
Eメールkkaku@city.soja.okayama.jp